小山工業高等専門学校研究紀要
第三十二号（二〇〇〇）二一三－二二二

梅　史　――五山文学――

Ume(Plum Blossoms) ―― In the Chinese poetry by Zen priests in the Muromadhi era ――

小林　祥次郎
Shojiro　KOBAYASHI

はじめに

日本人は梅についてどのように感じているか、それはいつごろ、どんな契機があって起こったものか。それを文学作品などによって考察しようとするものである。本稿では室町時代の五山の僧徒の漢詩文での梅の扱い方について考察する。

奈良時代のものについては、『群馬県立女子大学　国文学研究』第十九号（平成十一年三月）に、『梅史（一）――奈良時代――』という小文をものした。以下の文中に『万葉集』『懐風藻』に言及した箇所は、これに述べたものである。

用例を上村観光編『五山文学全集』所収の作品に求めた。ほぼ室町時代全体にわたる五山文学であるから、時代の前後、あるいは個々の作者の間には、それぞれ特色があろう。それらを等しなみに扱うのは不適当かもしれないが、同じ禅僧である作者たちには共通するものがあるであろうというのが、わたくしの立場である。なお、右の全集には誤植ではないかと思われる箇所があるが、比較する本がないので、疑いを残しながらも原文のままにする。詩の題が十字以上の長文にわたるものは、初めの数字を記して以下を…とした。

漢詩文というものは中国文学で書くものであるというのを何かで読んだ記憶がある。五山の僧侶は、中国の詩の感じ方を参考にして作詩しているのであろう。中国の詩では梅についてどんな把握をするのかについて、明の楊淙の著という『円機活法』（架蔵の明暦二年八尾勘兵衛版の大本による）を参照する。『円機活法』は明の万暦年間（一五七三－一六二〇）叙刊であるから、五山の僧徒が参照するはずはない。しかし、同書は「中国でも俗書」ではあるが、「作詩に当り、その子目についての基礎的知識を得、先人の把握のしかたを知り、詞藻を豊富ならしめるのに極めて有用であ」り、「徹底して作詩の一点に目的を絞った完全な実用書である。」（『日本古典文学大辞典』頼惟勤氏執筆）。だから、そこに記してあるような感じ方を中国文学ではしているという証になる。同類の他の本を知らないし、便利な本であるので、これを用いた。同書の「梅花」の項は特記せず、それ以外は項名を記す。

参照すべき注釈のほとんどない文献なので、失考が多いことと思う。ご批正を賜りたい。訓点の付いていない本が多く、初めは引用の漢文に訓読も添えて、これについても御示教を戴きたいと考えたのであるが、紙幅の都合で削った。

1　早春の花

梅は早春の花で、他の花に先んじて咲く。中国でも古くから、

梅花特早　偏能識春（梁簡文帝「梅花賦」『芸文類聚』所引）

などあり、『万葉集』『懐風藻』にも、そのことを詠んだ例はかなりある。

五山の詩文でも、

梅者百花之先登也『済北集』八（虎関師練）「早梅軸・又」

とあるのをはじめとして、

小林　祥次郎

受得百花元始誉　氷雪面孔甚清癯『済北集』二「梅花（第四）」
夫万花競春也。惟梅称第一。…匪梅不知春『翰林葫蘆集』七（景徐周麟）「祭梅雲和尚文」

など、例は少なくない。

立春・元日には咲いているとする。

乍聞春色到山家　起看梅梢悉着花『不二遺稿』中（岐陽方秀）「立春探梅」
屋後寒梅先竊暖　春風也可不労催『済北集』三「元日」

などとある。

右のように、梅は寒さの中に花を開いて暖かさをもたらす。

尤喜傍簷梅一樹　開時不有北枝寒『済北集』三「冬暖」

梅は花の先駆けである。

高称独魁花卉上　寒盟三友竹松傍『済北集』二「梅花（第七）」
万年老樹雪封苔　本是百花頭上魁『禅居集』（清拙正澄）「古梅」
及乎桃李艶陽之時、為百花魁『翰林葫蘆集』二「古梅」

『円機活法』に「是花魁　［古詞］不是花魁誰是花魁」とあり、『大漢和辞典』にも引用する。

他に先駆けて咲くので「花の兄」という。黄庭堅（山谷）の、

含香体素欲傾国　山礬是弟梅是兄「王充道送水仙花五十枝欣然会心為之作詠」

によるものとされる。

たとへば梅を花の兄と申事、万の草木の先に花開が故に、花の兄と申なり（梵燈庵袖下集）

それ大方の春の花、木々の盛りは多けれども、花の中にも初めなれば、梅花を花の兄とも言へり（謡曲・難波）

など、室町時代の用例がある。五山の詩文で、

花曰梅兄以好通　就人求字夜来風『翰林葫蘆集』四「次韻月心少年試筆」

はそれによるものであろう。

二十四候それぞれに新たに吹く風に応じて咲く花を配当した「二十四番花信風」の、第一である小寒一候は梅花である。

按歳時記曰、自初春至初夏、有二十四番風、始於梅花、謂之花信『翰林葫蘆集』八「祖英字説」

と、そのことを記した文がある。

蕾珠徐綻一枝遍　村落未知春信風『松山集』（龍泉令淬）「瓶梅」

あるいはこの例は、『円機活法』の「探梅」の項に「探春信」とあるから、そういうものに拠ったものか。

「早梅」という語は、

万木春回尚冱陰　一枝独自受陽薫『済北集』四「早梅」
然而古今賦早梅者、只言臘前、未言為天下之先焉。不知先天地者是真早梅也『済北集』八「早梅軸・又」
暗香浮動月黄昏　何処早梅風裡開『東帰集』（天岸恵広）「象先」

などある。『円機活法』には「早梅」という一項があり、「先開」「朔風飄香」「一枝開」「第一春」にそれぞれ引用がある。「早梅」という語は、『芸文類聚』に「早梅」と題する詩があるなど、唐以前からあるから、何に拠ったということでもなかろう。

かなり早い時期では、十月に梅を待つという作がある。

十月山中俟早梅　巖松渓竹怪花開『南游稿』（愕隠慧彝）「先師南游日…」

現実に十月に返り咲きくこともあったのかもしれないが、陸游（放翁）の詩に、

疎梅已報先春信　小雨初成十月寒（成都歳暮始微寒小酌遣）

などとあり、『円機活法』の「早梅」の項に「十月凍墻隅」「素艶応攙十月開」などとあるから、こういうことを詠むのは、そういう中国文学の影響も受けているのかもしれない。

もちろん遅い梅もあり、

山中底事礙春来　二月中旬未見梅『東海一漚集』一（中巌円月）「春分後梅未開…（第三）」

などという例もある。右の詩は実際の経験を扱っているのであろうが、それを詩に詠むことは、『円機活法』の「瓶梅」の項に「二月梅」という語があるから、これまたそういう中国の詩が意識にあってのことであろう。

特異なものに、「炎天の梅」という例がある。

落絮飛花春尽時　忽々告別出京師　近公如雪夜来夢　醒後炎天梅

一枝『翰林葫蘆集』三「寄種玉菴」

同じ『翰林葫蘆集』五に「六月梅花」という七言絶句が三首ある。

これは「炎天梅蘂簡斎詩」（禅林句集）による表現で、芭蕉も『奥の細道』の出羽三山の章に「炎天の梅花爰にかほるがごとし」と、これを用いている。

2　落梅

落梅というのは、散り落ちた梅の花である。中国では古く「梅花落」という楽府題があり、日本では『万葉集』などにもこのことを詠んだ歌がある。『円機活法』にも「落梅」という項が立てられている。五山の詩文にも例は少なくない。いくつかを掲げる。

朔風凛烈客思郷　落尽梅花無暗香『済北集』四「聞角」

眼前有景那堪賦　風攪梅花作雨零『空華集』八「野州旅亭会肯心田次韻」

帝土游車芳草上　巖中古寺落梅春『閻浮集』（鉄舟徳済）「璞侍者韻」

梅落江樓玉笛風　枝頭何処覓残紅『南游稿』「同珂知客旅中看花韵（第二）」

明朝又恐随飛雪　紅燭影中花夜来『翰林葫蘆集』三「秉燭看梅」

3　紅梅

梅は白いのが普通であり、当然それを詠んだ作は多い。

昨夜梅辺天下白　村僧吟立鬢成糸『翰林葫蘆集』三「梅辺評雪」

梅を月よりも白いと詠んだ作もある。

小窓一夜白於月　樹下掃残宜読書『翰林葫蘆集』三「梅辺評雪・又」

白さについては、雪や氷と取り合わせることが多いので、それは項を改めて次に述べることにして、ここでは紅梅について見ることにする。

庭前新放臘前紅　絳雪重々白雪中　未必用心歳寒後　羞同妖艶媚春風『真愚稿』（西胤俊承）「臘前江梅」

紅梅は妖艶なのである。

氷容不上時人眼　故著臙脂染小紅『空華集』一（義堂周信）「次韻詠紅梅」

紅梅が目に着くものであることを、氷のような白梅では目につかないから、臙脂を着けたとしている。このような把握は、蘇軾（東坡）に、

怕愁貪睡独開遅　自恐冰容不入時　故作小紅桃杏色　尚余孤瘦雪霜姿「紅梅三首（第一）」

という詩があり、それらの影響であろうか。

俗眼元嫌白　僧流亦愛紅『真愚稿』「題墨紅梅」

これも、白梅は一般には好まれず、僧は白梅だけでなく華やかな紅梅も愛するというのである。

厭見官梅歳々紅　多誇富艶酔春風　如何一樹空山下　開向蝋前氷雪中『真愚稿』「蝋月江梅」

という、紅梅が富艶なので厭うという作もある。

紅梅に、「南枝・北枝」と言うことがある。枝によって開花の遅速のあることをいう。

伝聞南北替寒暖　素雪絳霞一樹分『済北集』四「紅白梅」

恰似逋仙両句佳　枝南枝北各奇葩『早霖集』（夢翁祖応）「紅白梅」

須信吹噓力　不分南北枝『空華集』六「次韻餅紅白梅二首…（第二）」

南枝冒臘瘦猶窮　北枝逢春艶更紅『空華集』七「寄題紅白梅奉戯春屋」

これまでにもあったが、紅梅でなくても、これを言うことがある。

尤喜傍簷梅一樹　開時不有北枝寒『済北集』三「冬暖」

「南枝北枝」というのは、唐の『白孔六帖』に、

大東嶺上梅、南枝落、北枝開、寒暖之候異也。

とあり、宋の戴復古の詩「山中見梅寄曾無疑」に、

樹頭樹底参差雪　枝北枝南次第春

とあり、日本では、平安時代の慶滋保胤の「早春同賦春生逐地形」（『本朝文粋』八）にも、

至于彼東岸西岸之柳、遅速不同、南枝北枝之梅、開落已異

とあるなど、梅について言う語句である。『円機活法』の「紅梅」の項には、

南枝向暖　詩話蜀州郡閣有紅梅数株。方盛開。…題詩壁上曰、南枝向煖北枝寒　一種春風有両般　憑伏高楼莫吹笛　大家留取倚闌看

とあり、特に紅梅について言うようになったのであろうか。

4　雪・氷との配合

梅と雪とを取り合わせることは、日本では『万葉集』『懐風藻』にあり、奈良時代から行われていた。雪と取り合わせる場合には、雪の中に咲くと詠むのであるが、梅を雪に見立てたり、逆に雪を梅に見立てたりすることもあった。五山詩でも、

如何是梅花　試揺枝上雪『性海霊見遺稿』「蔵主秉払索話」

臈底多寒未見梅…明朝又恐随飛雪『翰林葫蘆集』三「秉燭看梅」

のように、見立てた例もあるが、五山詩では、多くは冷たい雪の中に凛然と咲く梅を詠んでいる。これまでの例にもあったが、いくつか引用する。

相期歳晩凌冰雪　待得梅花結箇朋『空華集』八「和朋字韻答介然上人村居云（第二）」

千里万里深雪裏　一枝両枝梅花開『南游集』（別源円旨）「雪川道中冬夜」

一枝影瘦清波上　応是孤山雪後看『蕉堅稿』「題梅花野処図」

白髪詩僧興未闌　満庭晴雪帯梅看『雲壑猿吟』（惟忠通恕）「迎春」

老我更無言贈子　梅窓月掛六花枝『了幻集』（古劔妙快）「送伊蔵主之京」

氷のほうも、梅の潔さを言うことが多い。

氷魂夢月梅先老　凍眼悲霜柳未眠『岷峨集』（雪村友梅）「乙丑立春後…」

深植善根植来仏舎　冰肌玉骨老猶癯『随得集』（龍湫周沢）「和種梅（第三）」

梅花不擇清貧地　玉骨冰肌与我癯『閻浮集』「移梅韻（第四）」

氷容玉為骨　独立避紅芳『真愚稿』「次韻十二歳…」

紅杏碧桃不如曾　此花二月潔於氷『翰林葫蘆集』三「二月梅晩」

雪と氷と合わせて、更に潔さを言うこともある。

蘂冷花曜氷雪深　如何淪落在山陰『不二遺稿』中（岐陽方秀）「詩謝居正侍者恵梅花」

的皪冰英帯雪寒　一枝荷恵重如山『随得集』「謝寄梅」

梅について「氷魂」「雪骨」というのは、蘇軾の詩に、

羅浮山下梅花村　玉雪為骨氷為魂「再用前韻」

とあり、陸游の詩にも、

広寒宮裏長生薬　医得冰魂雪魄回「梅花」

とある。前者は『円機活法』に、「雪骨氷魂［坡詩］」として引用する。

『円機活法』には「氷姿玉骨」という語句もあり、『桂林記』に「袁曹之宅後有梅花六樹…氷姿玉骨世外佳人。但恨無傾城之笑耳」とあるのを引用する。

「氷肌（玉骨）」は、蘇軾の

玉骨那愁瘴霧。氷肌自有仙風。梅仙時遣採芳叢「梅花詞」

や、黄庭堅の

得水能仙天与奇　寒香寂寞動氷肌「劉邦直送早梅水仙花」

などによるのであろう。

ちなみに、雪でも氷でもないが、梅について「的皪」とするのも、蘇軾の作に、

春来幽谷水潺潺　的皪梅花草棘間「梅花二首（第一）」

とあるから、そういうものが影響しているのではないか。

雪や氷の清さは仏に通うものとすることがある。

不須更刻栴檀像　雪骨氷肌浄法身『翰林葫蘆集』二「古梅」

なお、紅梅についても、

点染難移氷雪心　孤芳寂寞老山林『真愚稿』（西胤俊承）「画紅梅」

のように、氷雪を比喩に用いることがある。

5　寒さ・冷たさ・痩せ

梅について、寒さとか冷たさとか言うことがある。

聞説寒梅独暖回　何知万木一時開『済北集』三「雪（第八）」
万木凋零春意少　歳寒心事不如梅『閻浮集』「移梅韻（第一）」
一枝影瘦清波上　応是孤山雪後看『蕉堅稿』「題梅花野処図」

また、それを痩せとすることがある。

万萼皆肥吾独瘦　群芳趨暖我居寒『済北集』二「梅花（第二）」
雪後梅花瘦更奇　黄昏月上影参差『空華集』四「題扇面（第二十二）」
憐殺梅花十分瘦　爻霜耐得一冬過『雲壑猿吟』「答月溪侍者見寄」

その冷えた清らかさは仏の世界に通ずるものがある。

深植善根来仏舎　冰肌玉骨老猶癯『随得集』「和種梅」

あるいは清貧の境遇でもある。

梅花不擇清貧地　玉骨冰肌与我癯『閻浮集』「移梅韻（第四）」

それは自己の理想の境涯でもある。

万萼皆肥吾独瘦　群芳趨暖我居寒『済北集』二「梅花」

痩せているのは仙人や道人に似る。

辱贈梅花瘦似僊　枝頭猶帯月嬋娟『空華集』四「和謝剛中恵梅花」
清癯自似道人姿　横折疎梅雪後枝『真愚稿』「雪心道人画梅」

如月寿印は、『中華若木詩抄』下に、義堂周信の

此花清絶似神仙　来自羅浮小洞天（紅梅。『空華集』に見えず）

に注して、「梅ハ氷肌玉骨ニテ太清絶ナルモノゾ。人倫ニ比センナラバ神仙也。羅浮ノ洞天ヨリ来リタレバ神仙ト見ヘタルモコトワリ也」と言う。

陸游の詩に、

梅花如高人　枯槁道愈尊「宿龍華山中」

という一節があり、「瘦」とはないが、宋の大儒の朱熹の詩に、

仙人冰雪姿　貞秀絶倫擬「梅堤」

とある。それらに通うものであろう。

梅に「瘦」と言うことは、蘇軾の作に、

故作小紅桃杏色　尚余孤瘦雪霜姿「紅梅三首（第一）」

とあり、陸游にも、

一渓水浅梅枝瘦　四野雲酣雪意驕「初春欲散歩畏寒而帰」

とある。『円機活法』に「江梅開瘦枝」「点点凌雪瘦」など「瘦」の字を用いた句が見える。本来は枝について言ったのであろうが、梅の花についても用いる語である。

小西甚一「冷えと痩せ」『文学語学』（第一〇号、昭和三三年一二月）に、「1　シナでは、詩文の美しさを氷雪とか氷玉とか形容することが、ごく普通におこなはれてゐた。2　この氷雪とか氷玉とかの形容は、梅の「艶をひそめながら冷えた美しさ」を言ひあらはすときにも、よく用ゐられた。…4　詩文に対する場合も、梅に対する場合も、その美しさを氷雪とか氷玉とか形容することは、五山の詩僧たちによって、シナのとまったく同じ用法が承けつがれてゐる。」「1　梅の美しさを「痩」といふことがある。2　その「痩」は梅の「艶」と矛盾しない性質の美である。3　それは梅の「寒」「冷」あるいは「氷」「雪」などであらはされる美しさとも矛盾しない。」「みづみづしい美しさをもちながら現世の俗臭をぬけきったすがすがしさ、妖艶豊麗に根ざしながらなまなましい肉体の温かみを離れたやすらかさ、さうしたおもむきをイメイジであらはすとなれば、おそらく白梅ほど適切なものは、ほかになかったのではあるまいか。」として、さらに「心敬のいふ「冷え」「痩せ」が、梅といふイメイジに媒介された仙界的な美と同じものであり、特殊な用法であることは、ほとんど疑ふ余地がない。」が、心敬は「一般的な用法の「寒」や「痩」を、心敬の最高理想である「冷え」「痩せ」と混同した」とする。

6　玉を吐く

先に引いた中に「玉骨」という例がいくつかあったが、梅を玉に譬える例が他にもある。

雪斎聯句梅如玉　氷几呵毫墨似淵『空華集』九「次韻答菊芳庭（第一）」

その中に、梅は玉を吐くとすることがある。

曾遊話到禁中寺　最憶宮牆吐玉梅『空華集』八「和酬龍門」
話到鰲山当日事　庭梅玉吐一枝花『随得集』「雪中逢友」

「吐玉」という熟語について、『佩文韻府』に『拾遺記』の例を掲げるが、梅についてのものではない。五山僧が梅について用いているのも、何か拠るところがあるのであろう。

7　植物との配合

［柳］この取り合わせは奈良時代からあったものである。

氷魂夢月梅先老　凍眼悲霜柳未眠『岷峨集』「乙丑立春後…」

青春著柳展眉来　華蘂猶慳放与梅『東海一漚集』一「春分後梅未開…（第三）」

一声塞笛梅花落　三畳陽関柳色新『空華集』七「送人北征兼簡石室」

帰路梅花迎昼錦　故園楊柳試春衫『空華集』九「送竺巖梵書記還郷」

［桃］この取り合わせも『懐風藻』に見え、奈良時代からあるものである。『円機活法』にも「笑桃李」とある。

梅綻麝嚢桃発紅　各将姿態媚春公『済北集』四「柳」

九十青陽強半尽　更愁桃李幾時開『東海一漚集』一「春分後梅未開…（第二）」

8　松竹梅

五山文学では松竹梅と取り合わせた例がかなり多く見える。

臨風羨殺荷山老　三友交友松竹梅『空華集』三「和荷山九峰春雪賦松竹梅招鈍　雪心二老」

高称独魁花卉上　寒盟三友竹松傍『済北集』二「梅花（第七）」

梅同松竹護幽居　晩節彌堅銕不如『真愚稿』「松竹梅」

蕭条山舎水辺村　独掩松間竹外門『随得集』「夢中詠梅」

一夜幽亭風雪天　梅花松竹旧因縁『翰林葫蘆集』三「歳寒亭」

倚杖一翁松二本　歳寒三友不羞梅『翰林葫蘆集』四「題画」

『中華若木詩抄』上に、「竹ハ松竹梅ノ三友トテ、梅松ト盟ヲ結ブ者也。…春生夏長マデハ、イカナ柔弱ナル草木モ、同ジヤウナレドモ、秋ヨリ後、冬ニ至リテ次第々々ニ見ユルナリ。厳冬ナラデハ、松竹梅ノ節操ハ見ヘヌ也」とある。

「歳寒の三友として尊ばれてきた松竹梅が、一セットとして文人の清廉さの印しとされたのは、南宋から元時代（十二―十四世紀）であり、いうまでもなく中国の思想であった。…今日の通念では、松竹梅は吉祥図様としてかなり流布しているが、この流行は江戸後期に入ってからのようで、むしろ民俗習俗の世界で吉祥化の意識が醸成されて、そのため意匠として松竹梅図が考案されたものらしい。」（矢部良明「梅への慕情と意匠化」『日本の文様　梅』）

9　動物との配合

［蝶］この取り合わせも『懐風藻』からあった。

今年幸爾蔵春密　免使遊蝶戯蜂来『空華集』二「詠伯仲梅」

西家胡蝶寒如此　不得近花春隔墻『翰林葫蘆集』三「梅辺別春」

［鶯］梅に鶯という取り合わせは、『万葉集』『懐風藻』にあり、奈良時代以後、日本で最も好まれたものである。

鶯辺不覚夕陽落　花過眼時心有詩『翰林葫蘆集』三「梅野吟歩」

某寺有梅鶯喚人　尋声野歩避車塵『翰林葫蘆集』四「鶯声喚雨」

10　梅の香り

梅の香りを詠むことは、『万葉集』には一例しかないが、『懐風藻』には例が多く、平安時代になると、それは常識のようになる。五山の詩文でも同様である。

寒梢忽著一鞭春　異色奇香両闘新『済北集』四「早梅和（第一）」

抜却禍根重種植　春回劫外始清香『随得集』「和種梅（第三）」

乍聞春色到山家　起看梅梢悉着花　只怪無風遞香去　不知残雪圧枝斜『不二遺稿』中「立春探梅」

徳在馨香不在紅　白花何必擅芳叢『南游稿』「紅梅」

五山詩では、香りを「暗香」と詠む例が多い。

朔風凛烈客思郷　梅花落尽無暗香『済北集』四「聞角」

夢寒不到孤山寺　無奈暗香浮動何『閣浮集』「移梅韻（第二）」

「暗香」と「疎影」とを並べることもある。

暗香疎影無風夜　花有声耶月有声『翰林葫蘆集』三「梅辺聴雪」

暗香疎影無聊頼　詠句人帰何有郷『不二遺稿』中「追和潁秀岩梅花小隠詩後」

これらは林逋（後述）の詩に、

疎影横斜水清浅　暗香浮動月黄昏「山園小梅」

とあるのによる（『円機活法』にも引く）。この詩、特にこの頷聯は、欧陽修が『帰田録』に激賞して以来、千古の絶唱として人口に膾炙している（今関天影・辛島驍『宋詩選』漢詩大系）。『鈍鉄集』（鉄菴道生）「早梅軸」には、

疎影横斜水清浅　暗香浮動月黄昏　是老逋早梅詩也。調高韻嶮、膾炙詩人口矣。

と、これを引用している。

「幽香」とすることもある。

度砌幽香風馥郁　当窓淡影月嬋娟『済北集』二「梅花（第六）」

寒月一痕花一吐　幽香瘦影奈春何『随得集』「和種梅（第四）」

「奥ゆかしいにほひ」（大漢和辞典）の意の「幽香」は、必ずしも梅に限るのではないが、蘇軾の詩に、

臨春結綺荒荊棘　誰信幽香是返魂「次韻楊公済奉議梅花十首（第四）」

という、梅に用いた例がある。

11　黄昏・月との配合

これまでにもいくつかあったが、梅に月・黄昏を取り合わせることがある。

報君莫掃堦前雪　留伴梅花月一痕『空華集』一「和韻戯答隣寺薫怗上人見招」

雪後梅花瘦更奇　黄昏月上影参差『空華集』四「題扇面」

度砌幽香風馥郁　当窓淡影月嬋娟『済北集』二「梅花（第六）」

黄昏月色対残雪　傍舎不看素服人『済北集』四「早梅和」

誰向庭梅報春到　暗香疎影月黄昏『随得集』「夢中詠梅」

香雪亭前鎖苔池　黄昏無影野梅花『翰林葫蘆集』三「依池底梅影詩韻」

「月黄昏」は先の林和靖の詩にあった。「月がおぼろなすがた」の意である（前掲『宋詩選』）。また蘇軾にも、

紛紛初疑月掛樹　耿耿独与参横昏「再用前韻」（この詩の首聯は「氷魂」の箇所に前出。これは頷聯）

というのがある。右の五山詩に「黄昏」を詠むのは、それらの影響であろう。

夕刻を「秉燭」とすることもある。

秉燭近梅紅正加　南隣酔月夜遊家『翰林葫蘆集』五「秉燭見紅梅（第一）」

月暗紅梅隔碧紗　為君秉燭照横斜「同（第二）」

「秉燭」と梅とを取り合わせるのも拠るところがあるのであろう。

12　駅使

梅に「駅使」を取り合わせることがある。

駅使江南路転賒　慇勤得折寄誰家『雲壑猿吟』「折枝梅花図」

駅使不伝南国信　黄昏和月看横斜『蕉堅藁』「題画梅」

不煩駅使知春早　清洛雪消花逐流『翰林葫蘆集』三「便面」

自今修得旧盟否　一朶遥煩駅使来『翰林葫蘆集』五「結尋梅社」

南朝の宋の陸凱が江南から長安にいる親友の范曄に駅伝で一枝の梅花を送り、

折花逢駅使　寄与隴頭人　江南無所有（一作別信）　聊贈一枝春

『全漢三国晋南北朝詩』（全宋詩・五）

という詩を添えた。『太平御覧』九七〇に引用する『荊州記』に見える故事で、『円機活法』にも「逢駅使」があり、この詩を掲げる。だから「江南」とだけ詠むこともある。

帳製梅花小如斗　誰伝新様自江南『蕉堅藁』「梅花帳」

先春且得江南信　雪阻梅花咲未開『了幻集』（古剣妙快）「折簡招伯英而不来…」

13　人名・地名

［林和靖］五山の梅を詠んだ詩には、林逋（和靖）のことをいうものが多い。林和靖（九六七－一〇二八）については、『大漢和辞典』を引用する。「林逋　宋、銭塘の人。字は君復。謚は和靖先生。博学、詩書に巧。西湖の孤山に廬を結び、二十年市に出でず、自ら墓を廬側に作る。娶らず、子なく、梅を植ゑ、鶴を蓄ふ。時人、梅妻鶴子といふ。」こういう隠逸の境遇は、僧たちの理想とするところであったろう。『中華若木詩抄』上に「淵明ハ花多シト云ヘドモ、菊ヲトリワケ

愛スル也。周茂叔ガ蓮ヲ愛シ、林和靖ガ梅ヲ愛スル如クナルゾ」とあるように、その梅を愛したことは、僧徒にとっては常識であった。

その詩の中の「暗香疎影」については先に触れた。

先生高風不可見　得見梅花可矣哉『蕉堅稿』「和靖旧宅」

和靖宅前湖水涯　有梅曾駐使君車『翰林葫蘆集』三「李及雪中訪和靖図」

画裏先尋和靖宅　扁舟載夢早梅前『翰林葫蘆集』五「題西湖」

次の例も林和靖であろう。

竹瓶斜挿松窓下　笑対西湖処士顔『随得集』「謝寄梅」

蘇東坡の詩に、林和靖のことを、

西湖処士骨応槁　只有此詩君圧倒「和秦太虚梅花」

と詠んだものがある。

ちなみに、

梅白し昨日や鶴をぬすまれし　芭蕉（野ざらし紀行）

も、三井秋風の風流を林和靖に比した句である。

［陸放翁］『中華若木詩抄』中に「陸務観ハ陸放翁ガコト也。梅ヲ愛シテ、梅ノ詩ヲ多クツクリタモノゾ」とあるように、宋の陸游には、梅花の詩が約百六十首あるという（小田美和子「陸游詩における「愁破」」『中国中世文学研究』第二十三号、一九九二年一〇月。なお、小田氏から「梅花と春－六朝詩と陸游詩を中心として」（藤原尚教授広島大学定年退官祝賀記念『中国学論集』平成九年三月）などのご論文を頂戴し、小論に若干の補訂を施したが、十分に生かしきれなかった）。

又想見後五百年放翁顛狂『早霖集』（夢巖祖応）「題紅白梅詩軸後」

暗香縦有百千樹　世上今無一放翁『南游稿』「同珂知客旅中看花韻（第二）」

一夜汴河生朔風　梅花千億鉄心同『翰林葫蘆集』三「陸放翁画像」

後の二例は、陸游の

何方可化身千億　一樹梅前一放翁「梅花絶句」

によるものか。

［屈原］『離騒』には梅が見えないということを言う例が目につく。

離騒花譜非全籍　要補楚人捜索疎『済北集』四「梅」

離騒遺而不録、当時屈平含忠憤吟楚沢。取蘭茝芳草以自況。何以梅喩己耶）『鈍鉄集』「早梅序」

未与群芳入楚騒　春風笑我対揮毫『翰林葫蘆集』四「題梅画」

元の陰時夫の韻書『韻府群玉』（この本は五山版もあり、僧徒の知るところであった）に、「忘却梅　少陵忘却渾閑事更有離騒－－－（曾蒼山海棠）」とあるのなどで知ったのであろう。

これについて、江戸時代のものであるが、『羅山林先生文集』三五（問対五）の「梅」という文に、次のようにある。

且楚之騒人採衆芳以比況焉者亦多多矣。独不及梅也此花蓋古不芳而後世有香歟。

ちなみに、芭蕉も「かの湘臣が汨羅の辺に梅を忘れ」（忘梅序）と書き、門下の万子も「屈原楚辞にわすれ、菅家宰府に招く」（『本朝文選』「愛梅説」）と書いている。

『論語』についても、

歳寒三傑有花在　恨殺魯論遺却梅『翰林葫蘆集』四「歳寒知松柏（第二）」

と、梅が見えないことを言ったものがある。これは、「子曰、歳寒然後知松柏之後彫也」（論語・子罕）を踏まえ、歳寒を言うなら梅を言うべきなのにとしたものである。先に記した松竹梅を「歳寒三友」と言うのも、あるいはこの文から出たものであろうか。

杜甫についても、

佳人一咲梅辺立　子美詩中無此花『翰林葫蘆集』三「梅花年後多・又（第三）」

とあるが、杜甫の詩には梅花を詠んだものが無いわけではないが、屈原の箇所に引いた曾蒼山の「海棠」が意識にあるのであろう。『韻府群玉』の注釈である惟高妙安の『玉塵抄』二一に「少陵ハ杜少美ナリ。母名ガ海棠ナリ。サテ海棠ノ詩ヲツクラヌ。必忘レハセヌゾ。」とある。『翰林葫蘆集』の著者景徐周麟は、誤解したのであろうか。

［羅浮山］『大漢和辞典』に「羅浮　広東省増城県の東。……山麓は梅の名所として古来名高い。」「羅浮之梅　隋の趙師雄が羅浮の梅花村に宿し、夢寐の間に梅花の精に会した故事。」とある。『韻府群玉』『円機活法』に「羅浮夢」という語句があり、『大漢和辞典』にも引用

する「龍城録」を掲げる。

夢入羅浮小洞天　幽人引歩月嬋娟『空華集』五「墨梅」

羅浮春夢断　和靖夜魂回『空華集』六「題墨紅梅」

羅浮仙子玉双童　李様白兮桃様紅『空華集』六「寄題紅白梅奉戯春屋（第二）」

羅浮仙子夢相見　腸断春衣隔彩霞『南游稿』「梅影」

使人宿幾羅浮月　夢破暁堂雲一龕『蕉堅稿』「梅花帳」

［姑射］『荘子』（逍遥遊）に、「藐姑之山有神人居焉。肌膚若冰雪淖約若処子」とある。これは「すきとほる程清らかな肌」（大漢和辞典）の意であるが、先に記したように氷肌が梅の形容となったので、藐姑山に梅を言うようになったのであろう。宋の朱熹の詩に、

姑射仙人冰雪容　塵心已共彩雲空「梅」

とあるなど、姑射に梅を言う例が見られる。

参横月落暗香来　姑射仙人氷胚胎『岷峨集』「梅坡手軸」

敦揖藐姑神　来隣寂寞浜『随得集』「題紅梅」

この両者を詠みこむ例もある。

紅者非謂羅浮女　白者豈曰貌姑神『随得集』「竺仙和尚謝献盆紅白梅…」

14　菅原道真

「南北朝、室町時代の禅僧が各自の趣味にあうところから、しきりに菅公愛梅説を吹聴するようになり」（長沼賢海「天満天神の信仰と変遷」『史林』四―二、四、大正七年。民衆宗教史叢書『天神信仰』所収）とあるとおり、五山の詩文には、梅を天神と結び付けた例がかなり多い。

紙幅の都合もあり、これについては稿を改めて詳しく考えることにする。

15　梅の実

最後に梅の実を詠んだものをいくつか挙げておく。

酸黄待結和羹実『岷峨集』上「梅渓」

黄金果熟益清新『草余集』上（愚仲周及）「梅林」

四月青梅半帯酸　霏霏細雨又黄昏『空華集』一「送恢上人為黄梅幹事…」

『松山集』には「熟梅」という詩がある。

［付記］ついでに、江戸初期の漢詩での状況を、林羅山・石川丈山・僧元政の三人の作品で見ることにする。羅山については、すべて梅の詩である『羅山林先生詩集』巻第五十（略号、羅山集）、丈山は『新編覆醤集』（略号、覆醤集）『新編覆醤続集』（略号、覆醤続集）、元政は『艸山集』による。

結論を先に述べれば、五山詩における扱いとさほど違っていない。そこで、以上記してきたことを箇条書きにして、それぞれの項目に該当する若干例を掲げる。

［先駆け］「（題）花魁梅」『羅山集』

［花の兄］臘裏風煙春較遅　花兄未肯啓氷肌『羅山集』「探梅（丁亥十月十日…）」

［花信風］地雷復処在梅辺　花信初看玉色鮮『羅山集』「早梅（仲冬二十五日…）」

［十月］「（題）十月梅花」『羅山集』

［炎天］六月挽回一朶春　清標疎影笑紅塵『羅山集』「炎天梅蘂」

［南枝・北枝］南枝縦是疑飛燕　唯憶美人春在西『羅山集』「羽林君再次前韻…」

孤山雪後覓春時　吟自南枝至北枝『艸山集』一九「梅二首（第二）」

［雪・氷］梅花元是氷雪産　清殺幽人一隻眼『羅山集』「同東山長嘯公梅花倭歌末句字」

雪催梅蘂送窮臘　梅帯雪花迎早春『覆醤続集』四「宿雪」

餅裡寒梅冰雪姿　灯花映色両相宜『艸山集』一九「灯下看梅」

［氷肌・玉骨］坎蘂纔開残臘中　氷肌玉骨寒応徹『羅山集』「早梅（探雪字又得落字）」

［瘦］梅本清癯詩亦癯　氷封雪圧悩林逋『羅山集』「探梅（第三）」

可憐氷雪膚　与我太清癯『艸山集』一八「病中観梅　其二」

［清貧］梅為貧賤友　詩律復留窮『覆醤続集』三「窮臘四首　其二」

積雪堆中寂寞浜　斯花長是伴清貧『艸山集』一九「雪後見梅」

[柳・桃]「(題) 梅柳争春」『覆醤集』一
[松竹梅] 嶺梅雲靉靆　巷竹雪模餬　一気梅生卵　自為太極図『覆醤続集』七「三友吟」
　与君同作歳寒友　松竹不花猶自香『艸山集』一九「早梅」
[暗香疎影] 疎影暗香何処来　始知昨夜一枝開『羅山集』「梅花成道和樺来韻」
[幽香] 宿雪在花風在柯　幽香年後覚温和『羅山集』「次敬義斎梅辺留人絶句之芳韻」
[月] 梅咖月華明　月和梅蘂馥『覆醤続集』四「咏月梅」
[駅使] 駅使帰時為遠信　騒盟寒処莫尋温『羅山集』「三品羽林君次東坡松風亭梅花詩韻…」
[江南] 江南物色雖多景　春在庭前第一枝『羅山集』「庭梅」
[林逋] 何遜林逋同詠題　清香玉色与人斉『羅山集』「漫和奉羽源君…」
　幽研写得文貞賦　清麗裁成和靖詩『覆醤集』一「見亭梅」
[離騒] 江南物色孰同工　莫道離騒忘不通　屈子振衣霑縞袂　木蘭露堕楚煙中『羅山集』「三品羽林君辱賜前題之芳和…」
　雪裡蔵香独自逃　此花幸不入離騒『艸山集』一九「梅三首(第三)」
[実] 臥牖聞梅落　臨墻数筍生『覆醤集』四「夏五即事」

なお、『羅山集』に「臥龍梅歌」という詩があり、『覆醤続集』六「寄貽加藤氏并叙」にも「臥龍梅」という語が見える。『大漢和辞典』には、例文を挙げていない。江戸後期には亀戸の梅屋敷のものが有名であるが、これらはどこにあったのであろうか。

『翰林葫蘆集』三の「古梅」という文に、

　雖然、龍者動物也、梅者植物也、動植雖殊、置之於方寸之地、則龍之為梅乎、梅之為龍乎、不可得而判焉。

とある。易の乾の卦とかかわらせたものであるが、梅を龍に見なすことは、すでにあったようである。

「受理年月日　一九九九年九月二十九日」